

エッセイ

# 生と死、そして希望

稲瀬 隆

秋の千歳川には、産卵・受精を終えて最後の時に身をゆだねるサケが、幾匹も上流から流れされてくる。体を横たえ尾ひれをゆっくり振りながら、その眼はただ澄んだ水の流れを通して秋空を見つめている。子孫を残す命がけの作業を終え、彼らは何を思うのか。次の世代に自分のなごしを残した、そんな至福に浸っているのだろうか。

## 花は咲く

震災復興の応援歌『花は咲く』。花々が咲く、ではなく、花は咲く。この世にどんな日々があれ、季節は廻り、花は咲く。この語り手は、亡くなった方では？ 大越健介氏（NHK）は、とある講演会でそう語った。『いつか生まれる』であろう次の世代に、『私』は何を残すことができたのか？ そう自問する歌詞。それまで感じていた霧が、晴れた。

なんの宗教も信じない人、あらゆる神も霊の存在も信じ

ない人、墓はいらぬ、人は死ねばみなゴミになる、とさえ言う人も・・・みな死者への祈りは口にする。程度の差こそあれ、どこかで死後の世界を思っている。三十万年前から続く死者への畏敬。信徒拡大をシステム化した、あまたの宗教ができるはるか以前から、人間社会の共通認識が、『死後の世界』を支えているのだ。

## メント・モリ [ment mori]

「死を忘れるな」。このラテン語の成句には二つの解釈がある。元来の意は『今を楽しめ、生きてるうちが花』だった。それがキリスト教の広まりとともに『現世での空しき快樂を慎み、来世に向けて善行を積み』という諫めになった。人はいつか必ず死ぬ。それは避けられない。どこかでそれに向き合う覚悟を持って。過去二千年余、この成句に触れた何百億かの死が静かに、そう囁いている。日々を大儀なく生きる人々は、死など恐れず、見向きもしない。だがひとたび難病、死病に取りつかれ、生が限られた時に初めてその終わり、死の重さを実感する。

その昔、八十歳になんなんとする古刹の僧が、「歳を重ねるほどに 死 が恐ろしくなった」ともらしたそうだ。

自我が膨らむほどに、我が無に帰する怖れがつのる。なんと正直で人間的な言葉か。他方、かれこれ二十年ほど前、我が子らが通った幼稚園の園長、自証院（通称：瘤寺）の御住職は、敬老の日、集った園児の祖父母たちに対してこう言われた。「我々最後の大事な仕事は、死を子供たちに見せることです」。至言である。

父はこの言葉通り、二人の孫に見守られて旅立った。

## 幼時の記憶

私も最近、日々一度は 死 を思う。いやこれまでも、もの心ついてからは、ほぼ毎日のように 死後 を思ってきた。いずれかの信者なれば日々の祈りに等しいが私の場合、単に純なる感謝である。原点は私自身の最も古い思い出、生まれて初めての 理解の記憶 だった。それとは、『ここ では お母さん とか ママ ということがあれ を指すのだ』と分かった瞬間である。 あれとは、自分が最も頼るべき存在だ、とそう分かっていただけだ。

短い動画のような記憶の中で、小さなわたしは、笑顔で話しかける三人の女性の前で、誰か、母以外の女性に抱か

れていた。二人はナースキャップを被り、一人は割烹着を着けている。場所は祖父の建てた産院の2階、洗面所の前だ。目の前の若い二人が

「ママですよ」「おかあさんですよ」

と語りかけてきていた。それが戯れであることが分かった時、言葉の意味を知った。

その後、ママが、この人であることを確信した刹那の状況は以前、本誌に書かせて頂いた。ピンクのガウンを着けた母が差し出す両手にむけて、這い這いの私が長い廊下を進んでいった時のことである。当時、産後に長く臥せていた母と過ごす時間はとても限られていた。

これらの場面を思い出して、不思議な切なさを感じたのは、ずっとあとのことだ。驚くほど冷静に「ここ」では、と悟った自分はそれ以前、一体どこにいたのだろうか、と。

### 死の現認

人の死に衝撃を受けたのは小学校一年生の時だった。恰幅がよくて声が大きく、パワフルだった産科医の叔父が、突然亡くなった。棺に納められた叔父の顔は、少し緑がかった土気色で、冷たく、蠅のようだった。『人は死ぬ。

硬く、冷たいモノになる。』地の底から湧くような怖れが体を支配した。そして眠るのが怖くなった。

大人が苦もなく眠りに就けるのは、次の目覚めを信じているからだ。赤子が寝る時ぐずるのは、たぶん、生まれる前の暗い世界に戻るのがいやだからだ。

全身麻酔で意識が落ちる時、われわれは再覚醒を信じて身を任せる。修理のために電源を切られたPCのごとく、すべての思考回路が止まったブラックアウト。一切の無あれが死後の世界なら、そこは夢も感覚もない、宇宙の果てのごとき暗黒。

人が宗教を求める原点は、死後への恐れ。だが何かを信じ、必ず再び目覚める時が来ると思えるなら、人は静かに死に臨める。

南米の、とある原住民は、人は死ねばみな密林のダニから始まる△進化する輪廻転生△の輪に入ってゆくと信じている。その△死△は、再生に向けた長い道程の出発点である。待ち受けるのは△苦難△であつても△無△ではない。すべての生命への共感と、死への恐れが一体化した死生観だ。もしかして彼らはヘッケルの反復説、△个体発生は系統発生を繰り返す△を知っていたのだろうか。

ば社会常識化した固定観念を打ち砕くかもしれない。

かつての同僚、Y先生（天文学）は著書の中で、古来の物理学の・哲学的課題、『時は物理量が、人為的に決められた単なる約束事か』を論じた。我々が知る空間の3次元とはあきらかに違ふ△時△を、ひとつの次元として並列に扱えるのか。

時は流れているようで、実は止まっているのかもしれない。見方を変えれば、時に流され続ける現実を抜け出す、△死△とは、無限と不変の時空に解き放たれることではないか。

Y先生は永遠の謎を残して二〇一三年十一月、時の川に浮かぶ船から降りて、静かに岸に上がった。

### 死神さん？

父は六年前、他界した。亡くなるおよそ一年前に、肺炎で入院した。ICUに運ばれた父に面会に訪れた夜、目覚めた父は朦朧として言った。

『死神さんですか？』

自分の息子だと分かったところ、孫が来た。また尋ねた。

『死神さんですか？』

**時の伸縮**  
日常、われらが暮らす△現△：うつつの世界では、古典的な物理学の諸法則が成立し、多くの場面で五感がそれを実感する。虚空から物質は生じず、物は上から落ち、時は逆行しない。しかし夢の中では時間や空間、自我さえも自在に変幻する。地理も歴史も飛び越えた舞台で、自分は他人にも、動物にも、モノにさえもなる。いや、夢でなくとも主観的には、△時△も△空間△も、容易に伸び縮みする。

相対性理論が登場して百年。今や物理量としての時や空間が、超日常的な条件下では延び縮みすることが小中学生にも知られている。最新の宇宙物理学は、宇宙の△虚空△は虚ではない、とさえいう。ブラックマターに満ちた宇宙。

真空の空間にさえ膨大なエネルギーが潜む。これまでは思いもしなかった△なにか△が素粒子論で説明できるかもしれない。超現実的な存在、生命を成立させるエネルギーを、俗にいう△霊的なものも含めて説明する試みは、△クォーク△が発見されたころからすであつた。亡き母の△意志△が男児を救った、と言われる『新潟地震の奇跡』も、説明できる時が来るかもしれない。進化を続ける物理学が、半

家族の間で笑い話になったが、ひとつ、冷たいものが心に引つ掛かった。

父は『死神さん』となにか契約でもしていたのではなからうか？ 実は、少々思い当たる節はあるが、長くなるのでここには書かない。

死の床の中では、パン屋になったり、潜水艦乗員になったり、いくつもの妄想の中で父は生きてた。きっと父の中ではどれもが真実だっただろう。我々が生きている、と信じているこの空間だけが△真実△の世界だと、誰が断定できるのだろうか。

### K 教授

K 教授は異彩の上司であった。折々に脈絡もない会話を交わし、二度、三度、死後の世界を語り合った。彼は学生時代、不安神経症を患い、死の恐怖に取りつかれたそうだが、心拍の乱れに夜も眠れず、哲学や宗教の書を読み漁ったが、書物の中に答えはない。しかし、臨床医として治療に没頭し、人の死に向き合ううちに、何かが吹っ切れたのだそうだ。そこで不思議な話も聞いた。瀕死の床に就いている老婆が、知人の家々を『お世話になりました』と回って歩いて

た△△のだ、と。そう語りながらも、俗にいう 生き返りの 臨死体験 などとは生きている脳の異常感覚に過ぎない、死後の世界はだれにも分からない、永遠の謎だ、と豪快に笑われた。純粹に哲学的な思考対象として△死△と△人間△を取り上げた『死とは何か』が上梓されたのはその頃である。数年の後、末期の膀胱がんが判明した。周囲もご本人も、自然とその手の話題に触れぬままに半年が経ち、逝ってしまった。爾来二十年。もし来世に居られるなら、あの時の答えをなにかしか、とつくに知らせてくれているはずなのだが。お沙汰がないというのが 回答 なのだろうか。

### 守護の霊

『守護神』『守護霊』と称される御霊の存在を固く信じている。それは何度か奇跡的な命拾いしたからだが、なかでも今から十年ほど前、熱海のテトラポッドから落ちる刹那の出来事は忘れようがない。うかつにも足を滑らせ、十mほど下の海の隙間に『落ちる』と思つた瞬間だ。目の前のポッドにしがみつこうとした身体は、思いもかけず百八十度回転し、『もうだめだ』と観念した、その足元にもう

一つ、下のテトラの先端面があった。わずかに突き出た二十センチ四方ほどの平面に、両の足が揃って載っていたのだ。この、あきらかに自分の意志ではない奇跡的な動きがなければ、身体は着先の冷たい海でテトラにはまっていただろう。容易に抜け出せないテトラポッドの隙間への転落

事故では、頭部外傷も多く、死亡例が多い。一人釣行だった私もおそらく、死んでいたにちがいない。死後の世界は分からない。だが、この世には、見えない力があることは実感した。それからは以前に増して日々、自分が活かされていることに感謝を重ねている。

### ミーム [meme]

人は子孫に何を残すのだろうか。生物は生きた証を遺伝子 gene として生命の系譜に残す。遺伝子は親が子・孫に体内に残す情報。生命が生まれて三十億年余、選択・淘汰が繰り返される歴史の中で、すべての生物種は競って自らの遺伝子を残そうとした。ヒトもその例に漏れない。だが加えて人は知恵の模伝子 meme を文化の系譜に残す。年月を経て伝承される知識や技術は、切れぎれに組み替えられながら、歴史の中で蓄積されてゆく。模伝子は、親が、教

師が、社会が、子孫に残す情報。人は個々死に行くとも、次代を生きる者へとつなぐ文明のバトン。

モノであれ情報であれ、次世代に有為な何かを確かに残せた、と思う時、人は役割を終え、満足のうちに終焉を迎えられるのだろう。ちょうど一日の大仕事をやり終えて、達成感の中で眠りにつくあの安らかさ。それが得られたら、と思う。

### 希望、そして『花は咲く』

△今△はすべて△過去△の礎の上にある。亡くなられた無数の命の上に我らは生きる。

△私△は未来に何を残すのか。太陽系が砕け、膨張する宇宙が死に果てる、そんな行く末までは思わない。思わぬまでも、せめて子の子、孫の孫くらいまでは、幸せでいてほしい。死後も抱く子・孫への思い。そういう念慮が意味を持つなら、人は△死△にたじろがず生きられる。

死せる魂の安寧を願い、見えざる守護を信ずれば、生者は自ずと礼を知る。△命△を慈しみ、△生△に感謝する。それがまた、生者の未来に希望を灯し続けるだろう。